未来の図書館 研究所

NEWS LETTER

No.7

2022.1.7

Contents

■ 新年のご挨拶
■ 2021 年の活動報告
■ 今後の活動予定
■ 古書店で何ができるのか
■ Library Compass：「情報の砂漠」と図書館の役割

■ 新年のご挨拶

新春の御祝詞を申し上げます。

旧年中は皆様にご支援をいただき、本当にありがとうございました。

わが国の公共図書館界は、高度経済成長の果実で急成長し、バブル期には振り返りの機会もあったかと思いますが、瞬く間に新自由主義の波濤をかぶってしまった感がいたします。現在それらを総括するとともに、未来への企図を急ぎ整えなければいけないところでしょう。その上すでに二年以上にわたるコロナ禍のもとにあります。

状況は厳しさばかりですが、このようなときこそ、単なる楽天的な想いではなく、ミッションを常に確認しつつ、先をめざす楽観主義が重要かと思います。当研究所も、今年は新たな年度から七年目に入ります。皆様とともに、これからの図書館のあり方を追究し、多くの貢献ができるようにスタッフ一同精励する所存です。本年も、より一層のご支援とご協力を賜りますように、お願い申しあげます。

皆様のご健勝とご発展をお祈り申し上げます。

二〇二二年一月

未来の図書館 研究所
所長　永田　治樹

2021 年の活動報告

3 月	■『未来の図書館 研究所 調査・研究レポート』Vol.4（2020）を発行しました
	■昨年度受託した「令和 2 年度都立図書館の在り方に係る調査検討等業務委託」に関わる報告書『都立図書館在り方検討委員会最終報告～AI 時代の都立図書館像』が，東京都教育委員会の Web サイトに掲載されました
5 月	■第 5 回シンポジウム「図書館とレジリエンス」の記録を当研究所 Web サイトにて公開しました
8 月	■Library Compass 第 1 回「改正著作権法」を当研究所 Web サイトにて公開しました
9 月	■Library Compass 第 2 回「図書館における「公平性」「多様性」「包摂」」を当研究所 Web サイトにて公開しました
9･10 月	■第 5 回ワークショップ「図書館員の未来準備」を開催しました
10 月	■所長 永田が青弓社より『公共図書館を育てる』（ISBN:978-4-7872-0078-5）を出版しました☛
11 月	■第 6 回シンポジウム「図書館とポスト真実」を開催しました
11･12 月	■国立国会図書館より調査業務を受託し，「デジタル資料の長期保存に関するアンケート調査」を実施しました

今後の活動予定

■LoFR オープンレクチャー「クラウドソーシングが不可能を可能にする：ライドシェアから図書館まで」4月開催予定

筑波大学図書館情報メディア系教授の森嶋厚行先生をお招きし，クラウドソーシングの本質とこれからの社会へのインパクト，この分野の魅力，図書館における今後の可能性についてご講演いただく予定です。

■『未来の図書館 研究所 調査・研究レポート』次号予告

次号は，第 6 回シンポジウム「図書館とポスト真実」記録のほか，5 周年記念号として研究レポートを拡大します。「持続可能な社会づくりと読書～「利他」で考える読書推進計画の試論」（太田剛氏），「図書館におけるファブラボ(メイカースペース)の可能性」（渡辺ゆうか氏）「未来の図書館と著作権法のあり方の検討に向けて－令和 3 年著作権法改正の意義と課題－(仮)」（村井麻衣子氏）の 3 点を掲載予定です。

今回は，第 3 回シンポジウム「図書館とサステナビリティ」にてご登壇いただきました，内野安彦先生にご寄稿いただきました。第 3 回シンポジウムのご講演の際の，「図書館が本を届けるっていう仕事をしなければならない」という内野先生の言葉が印象に残っています。その後，内野先生は古書店を開かれているとのことで，現在どのような思いで本を届け続けていらっしゃるのかについて，ご寄稿いただきました。

■古書店で何ができるのか

内野（うちの） 安彦（やすひこ）

◆雀羅書房のあるところ

茨城県潮来市内の国道 51 号を鹿島神宮に向かって自動車を走らせると，眼前に広大な水面が現れます。それが琵琶湖に次ぐ大きな湖の霞ヶ浦を構成する北浦です。その直前で国道 51 号は新旧二つの道に分かれます。旧道を選び神宮橋（950 メートル）を渡り始めるや否や，前方右側に朱色の水上鳥居が見えてきます。鹿島神宮の西の一之鳥居です。厳島神社の鳥居を凌駕するその高さは水底から 18 メートル。現存する鳥居とは違いますが，かつて歌川広重が『六十余州名所図会』で描いた「常陸 鹿島太神宮」の風景がこの地，大船津です。

地名からもわかるように，かつてこの地は，江戸から明治時代にかけて，多くの河岸・渡船場として，この辺一帯で最も隆盛を誇った船着き場で水上交通の要衝でした。

幕末の水戸藩で徳川斉昭の腹心であった藤田東湖は「香取より船に乗りて，息栖の明神へ参る，これは鹿島の別所なり，是より鹿島の大船津へ打渡りて見れば，一の鳥居海の中へさし出て，いと高やかに作れり，二の鳥居まで十八町が間，爪先上りに登る」（『常陸帯』）と記しています。ちなみに「十八町」はキロに換算すると約 2 キロです。

香取神宮（千葉県香取市），息須神社（茨城県神栖市）と鹿島神宮の三つを巡ることを「東国三社詣り」と呼び，江戸時代，関東より北に住む人がお伊勢参りの後に行く「禊の三社詣り」として信仰されていました。往時より松尾芭蕉や小林一茶などの文人墨客がこの地で下船し鹿島神宮に詣でました。現在ではタモリや火野正平が人気テレビ番組のロケ地として一之鳥居を訪ねています。

この一之鳥居から 200 メートルと離れていないところに道路から隠れるようにあるのが，私が店主を務める「雀羅書房（じゃくらしょぼう）」です。

◆どうして古書店を始めたのか

一之鳥居が再建されたのは 2013 年。それまで訪れる人などいなかったこの地に，にわかに旅人が訪れるようになったのです。晩年の歌川広重が日本屈指の名所として描くほど，かつては人が行き交う賑やかな場所であったことに思いを巡らすこともなく，鳥居をカメラに収め，足早にこの地を後にする旅人に，せめて地元の者としてウェルカムを伝えたい。そしてできることなら，十数人に一人くらいはいるであろう本好きと話がしたい，というのが古書店を始めたきっかけです。

かつて国道 51 号として道の両側に商店街が連なっていたこの地ですが，南側に新たに国道が整備されたことにより，国道から市道となり，交通量は激減し衰退の一途をたどってきました。大衆食堂を営んでいた我が家もその面影は，いまは全くありません。

鹿島神宮駅から 20 分ほど歩いて一之鳥居に来られる旅人にとって，喫茶店もなければ公共のトイレもない。地元民も滅多に歩かないこの道を往来する旅人を見るにつけ胸を痛めていました。

◆やはり本で床が抜けた

古書店を始めるそもそものきっかけは，本の重さで床が抜けたこと。この 10 年間，年に 1～2 冊，本を上梓していると，当然ながら資料として買う本も少なくはなく，捨ててしまう本を除き，年間に 200 冊くらいは増殖していました。人の寝床ならぬ本の寝床と化した寓居の 3 部屋はすべて床が見えず，本がぎっしり詰まったダンボールの山でした。必要なときに必要な本が見つからず，買ってもすぐに読まない本は，持っていることすら記憶にないので，また同じものを買う始末。

そこで，還暦を迎えたのを機に，終活も兼ねて一念発起し断捨離を敢行しました。3,000 冊ほどをゴミに出し，残った 4,000 冊ほどをどうするかと思案。はじめは私設図書館にしようと思っていたのですが，断捨離の難を逃れた本の大半は，公共図書館の司書に嫌われ，市内の書店でも置いてもらえないレア本ばかり。そうなると，借りて読むのではなく，手元に置きたいということになるのではないか，と友人から言われました。

以前，拙著の出版記念サイン会を塩尻市内の書店でやったとき，「この本は私の手元にあるよりも内野さんの手元にあるべき本だと思う」と，市内に住む知人から非売品の貴重な蔵書をいただいたことがありました。この経験から，自分の幸せのためではなく，本の幸せを考えれば，私より本を愛してくれる人の元に本は行くべきであると思い，数百冊の“絶対譲らない本”以外を販売する，ただし，買取りも，「せどり」も行わない風変わりな古書店「雀羅書房」が自宅の離れに誕生したのです。

しかし，開店した 2020 年 4 月 5 日は，既にコロナ禍のニュースで持ちきりの頃でした。開店の日には必ず駆けつけます，と言ってくれていた全国の友人の来店はすべてキャンセル。僅か 3.5 坪の店内は開店祝いで届いた十数個の生花の籠で埋め尽くされました。洒落でつけた店名が，洒落にならない「門前雀羅」のリアルな日々の始まりでした。

周囲の住民を思えば，こんな時期に人を呼び込む古書店を開くなんて不謹慎との誹りが聞こえてきそうで，ほどなく休業としました。それでも徳島，新潟，宮城，福島，長野，埼玉，神奈川，東京，群馬など，遠方から訪ねてくるお客さんはそれなりにいて，旧交を温めたり，新たな出会いを楽しんだりもしています。

棚に並ぶ本は店主の私がすべて読んだ本のみ。棚差しした本の花布（はなぎれ）に指が触れようものなら，傍らから「その本はですね・・・・」と要らぬ口を出す始末。古書店主は寡黙と決まっているのに，なぜか雀羅書房の店主はおしゃべりです。もちろん，あっちに行っていて，との希望があれば，店外にておとなしく待ちます。でも，会計の時に，クルマ，出版，漫画，プロレス，ロックなど，手にした本で盛り上がるのが雀羅書房。だから 1 日に 2～3 人のお客さんで十分なのです。できればお客さん同士の会話に発展すれば，なお結構なこと。「出会ったきっかけは雀羅書房」だなんてことになれば，こんな素敵な話はありません。

◆縁に支えられた雀羅書房

雀羅書房は様々な縁で出来上がっています。

一つ目は，「雀羅書房」の扁額です。塩尻時代から親しくさせてもらっている 3 人から贈られた手作りの幅 1.3 メートルの重厚なものです。庭に設えたパーゴラに掲げ，来店者の記念写真スポットとなっています。

二つ目は，シトロエンを生涯描いたイラストレーター，今村幸治郎氏のグッズを販売していること。生前からの交流が遺族の方のお許しをいただけ，ポストカード，マグカップ，トートバッグ等を扱わせてもらっています。

三つ目は，親しくさせてもらっていた市内の書店が二十数年前に閉店した際に，廃棄するのならば，と引き取った書架を活かしていることです。

◆古書店の愉しみ

雀羅書房の“売り”は，偏向したコレクションです。1,500 冊程度しか並べられない書架に，図書館のように 0 から 9 類まで満遍なく本を揃えることは困難です。並べたところで，すべてのジャンルが中途半端なコレクションにならざるをえません。よって，小説はほとんど置いていません。開店早々，近所の高齢の女性が来店されました。地域の読書会などの活動歴のある読書家の方ですが，「あらら，難しい本ばかりで読めるようなものがないねぇ」と言われました。仕方ありません。

たった 3.5 坪の古書店でも，クルマの絵本（実車がわかるよう描かれている作品），クルマの広告の本，クルマがリアルに描かれた文学作品，出版関係の本（書店主，古書店主，出版社社長，ジャーナリスト，大学教員などによって書かれた読書や出版文化をテーマにしたもの）は，そもそも出版点数が少なく，おそらく日本有数の品揃えと自負しています。

長引くコロナ禍で，お客様の大半は事前に連絡をされてから来店されます。知人なら，その方の好みそうな本やグッズを展示することでウェルカム感を演出します。乗ってくるクルマがわかれば，例えばシトロエンのオーナーなら，私の二十年余のコレクションである新聞の全面広告の中から，シトロエンを選び出しパネルに入れてお迎えします。こんな古書店，日本に一軒もないと思います。2021 年 11 月に福島から来られたお客様は「プジョー 208」のオーナーなので，年式こそ違いますが 208 の広告で歓迎しました。

そして，お客様の時間が許せば，昼食を一緒にしたり，市内外の観光案内もしたりします。これは地元のコミュニティ FM で，本と図書館をテーマにした番組の MC を 7 年半務め，その間，スタジオ収録のため迎えた 100 人を超えるゲストを案内した経験から，どうしても熱烈歓迎せずにいられないのです。宿泊や飲食やお土産で地域にお金を落としていただくために，ガイドとして働くのは元自治体職員として当然の務めだと思っています。

◆本が紡ぐコミュニティとは

昨今，「本のある場所」がまちなかに広がってきました。かつて書店と図書館に限られていたものが，地域文庫，まちライブラリー，ブックカフェなど，さまざまなスタイルで本と触れ合えることができます。

図書館は本を借りるところであり，書店は本を買うところとすれば，先の「本のある場所」はどういうところでしょうか。私は本に会いに行くところであり，その本をセレクトした人に会いに行くところでもあるのではないかと思っています。だからそこにある本は饒舌であり，店主やスタッフもお客様とのコミュニケーションを何よりも楽しみに待っています。

雀羅書房であれば，クルマやロックや酒の話など，互いの趣味が合えば，会話もお土産にお持ち帰りいただけます。

■WEB サイト参照リスト

1. 雀羅書房について -Yasuhiko Uchino
https://uchinoyasuhiko.wordpress.com/2020/04/01/kinkyo/
2. 雀羅書房 Facebook ページ
https://www.facebook.com/%E9%9B%80%E7%BE%85%E6%9B%B8%E6%88%BF-108040220931343/

■ 情報ネットワーク社会のなかの「情報の砂漠」

『情報通信白書』(総務省)などでみられるように,社会に情報ネットワークが定着し,人々がやりとりする情報は指数関数的に増大をしている。その実,受け止められない情報が溢れ,情報過多の状況にあるといえるかもしれない。他方,「情報の砂漠(information deserts)」も目に留まるようになった。

その一例には,昨今新聞などで頻繁に取り上げられるようになった「報道砂漠」とか「ニュースの砂漠」がある。米国では 2004 年以来 4 分の1にあたる 2100 もの地方新聞が廃刊され,現在では全国 3143 郡(カウンティ等の単位)のうち,200 以上の郡には新聞が存在せず,また存在する郡でも半分は 1 紙しかなく,3 分の 2 には日刊紙あるいはそれに代わるものがない状態になって,情報が適切に入手・活用できない地域が出現しているという[1]。

情報の砂漠[2]とは,これら報道情報の分野だけのものではなく,情報資源にアクセスができない,図書館のない地域,あるいは情報が日常的に取得できない人々,今ではインターネットへのアクセス手段をもたない人々や情報リテラシーが十分でない人々などが置かれた状況を指す。そして多くの場合,経済的に停滞した地域やさまざまな不利を被っている人々がこうした事態に陥っているといえる。誰もが必要な情報を利用できるという民主主義社会の原則を確保するためにこうした状況を打開する必要があり,公共図書館はそのための重要な役割を果たすはずだと,私たちは考えてきた。

■ 「小さな町のニュースを生き返らせる米国公共図書館」

昨年の当所のシンポジウム(「図書館とポスト真実」)で,登壇者の伊藤智永さんが,潰れていく地方新聞の代わりに地域のニュースを発掘する拠点として活動する米国公共図書館についての報道[3]に言及され,同様の趣旨の記事が「アトランティック」誌にも出ていたのを思い出した。地元の報道機関が消失している状況で,図書館員やボランティアが地域の情報を確保し共有している事例とともに「地域情報とコミュニティ支援を展開する図書館には,メールによるニューズレターなどのためにコンテンツをつくったり選んだりする図書館員が必要となる」との報告(「小さな町のニュースを生き返らせる図書館」)[4]である。これも,米国公共図書館の地域への積極的な関与を伝えたものだ。

とはいえ,わが国の場合,そのような活動を参考に,情報砂漠からの脱却を目指す図書館の活動を導きだすことができるかといえば,それほど容易ではない。まずは情報資源,そして情報機器やソーシャル・メディアなど必要な道具を取り揃える必要がある。しかしそこまではよいとしても,図書館を通じた情報利用に馴染んでこなかった人にとっては,それで十分な解決にはならない。この部分は,情報利用のリテラシー支援に関係する。

■ 情報リテラシーへの対応

容易ではないといった理由には二つある。第一は,わが国の公共図書館界が抱える問題である。私たちはモノ(図書・雑誌)をまず届けなければというあまり,利用者の情報リテラシーについてはあまり関心を向けなかった。日本図書館協会で「図書館利用教育ガイドライン」が 20 年ほど前に作成されたとき,公共図書館版のみ「教育」という言葉を避けて「図書館利用支援ガイドライン」とし,現状で達成可能な目的に直し合意が得られたという[5]。そしてそれ以降これは手つかずのままである。今日の公共図書館が果たすべき役割からすれば,情報リテラシーへの対応は極めて不十分である。ただし,最近定着し始めたレファレンスサービスや課題解決サービスには,この実践が含まれるし,昨今のディジタルリテラシー教育(情報探索技術やソーシャル・メディアの使い方など)の動きとともに,この遅れを挽回するよい機会を与えてくれそうだ。

もう一つは,これまでの図書館の情報リテラシーの捉え方にある。それは有益ではあるとしても,図書館の使い方,資料形式の理解,そしてその延長としての情報探索技術のスキルとして定型化されたままである。しかし人々は日常,それぞれの生活環境の情報文脈ごとにさまざまな情報リテラシーを獲得し運用しているのであって[6],図書館のなかだけのものではない。例えばロイド(Annemaree Lloyd)は,情報リテラシーの実践に関する消防士を対象とした探索調査から,「情報リテラシーは、(中略)一連の文脈から離れたスキルとして定義される」ものではないとし「情報リテラシーを持つ人は,職場で,あるいは地域において社会的,物理的,そして文字情報が表すさまざまな要素の混じり合った情報景観を理解し適切な情報行動を選べる」[7,8]という。情報リテラシーに対する考え方は現在ではこのように見直されている。公共図書館においても,人々が抱える課題(要求)や,地域にどんなことが起きているかなどを理解し,それに沿った情報リテラシー支援ができれば,図書館サービスが届かない情報の砂漠を減退させられるだろう。

(永田治樹)

<参考資料・注>

1. Abernathy, Penelope Muse (2020). New deserts and ghost newspapers:Will local news survive ?. Univ. of North Carolina, Hussman School of Journalism and Media, p.11. "https://www.usnewsdeserts.com/wp-content/uploads/2020/06/2020_News_Deserts_and_Ghost_Newspapers.pdf", (参照 2021-12-28).
2. Cf. Lee, Myeong & Butler, Brian S. (2019). How are information deserts created ? : A theory of local information landscapes. Journal of the Association for Information Science and Technology, 70(2), p.101-116. Lee らは,情報の砂漠を「情報不平等の概念空間」と規定している。
3. 沢村亘. 高校生が議会の実態をあぶりだす:メディアの新たな担い手. 朝日新聞. 2021-10-20, 朝日新聞デジタル, "https://digital.asahi.com/articles/ASPBH4RLYPB4UPQJ01N.html?iref=pc_ss_date_article", (参照 2021-12-28).
4. 米国東部のボストンで発行されている月刊雑誌。記事は,Beard, David. The Libraries Bringing Small-Town News Back to life: As local news outlets disappear in America, some libraries are gaining new relevance. The Atlantic. 2018-01-28, "https://www.theatlantic.com/technology/archive/2018/01/libraries-local-news/551594/", (参照 2021-12-28).
5. 日本図書館協会図書館利用教育委員会編. 図書館利用支援ガイドライン. 日本図書館協会, 1999, p.4. "http://www.jla.or.jp/portals/0/html/cue/gl-p.pdf", (参照 2021-12-28).
6. 瀬戸口誠, 公共図書館における情報リテラシー教育の意義と課題:情報アクセス保障の観点から. Journal of I-LISS Japan, 1(2), 2019, p.44.
7. Lloyd, Annemaree (2006), Information literacy landscapes:an emerging picture, Journal of Documentation, 62(5), p. 570.
8. 情報景観の議論については,Savolainen, Reijo (2021). Information landscapes as contexts of information practices. Journal of Librarianship and Information Sciences, 53(4), p. 655-667.

発行

編集・発行:株式会社 未来の図書館 研究所

〒113-0033 東京都文京区本郷 4-9-25 2階 ※2021 年 4 月にオフィスを移転しました

✉ info@miraitosyokan.jp ☎ 03-6673-7287 FAX 03-6772-4395

URL: http://www.miraitosyokan.jp https://www.facebook.com/miraitosyokan/

図書館づくりのご相談,原稿執筆,講師依頼等,その他お気軽にご連絡ください。

これまでの実績について,「当研究所員が携わった仕事(2021.3 現在)のご紹介」を Web サイトに掲載しています。